



食堂運営から地域コミュニティの拠点へ

一般社団法人 ワタママスマイル



代表理事
菅野 芳春さん

すがの よしはる

震災直後、2,000 人を超える避難者の生活の場となった渡波小学校。ワタママスマイルの活動は避難所運営の炊き出しから始まりました。閉鎖までの 7 ヶ月間、自ら被災をしながらも炊き出しを続けてきた石巻渡波のお母さんたちが担い手となり、現在は地域の方々へのお弁当の宅配事業を展開しています。

2014 年には新たな拠点を構え、配食サービスに加え、市民農園の提供や収穫祭の実施、地域の方々と連携した地域食堂の運営などを行い、お母さんたちの試行錯誤が日々続いています。

菅野さんたちは、避難をしている人々に「自治力」を求めました。炊き出しを担ってもらう人を避難所の中で公募し、有償ボランティアとしてその役割を果たしてもらう方法をとりました。キャッシュフォーワークと呼ばれる方法です。仕事をすることによって「ありがとう」と言ってもらえる環境は関わったお母さんたちの笑顔になり、避難所で暮らす他の人々が前向きな気持ちを持つ後押しとなりました。

そうした活動を続ける中、避難所が閉鎖する 10 月、関わっていたメンバーに気持ちの変化が表れました。「避難所がなくなることによって困る人たちがたくさんいるのではないかと、そうした人々のために何かできないだろうか」という思いです。一致団結し、震災で使えなくなっていた飲食店の調理場を借り、仮設住宅に住む高齢者や住宅の 2 階で生活する人々などへお弁当を届ける「ワタママ食堂」をスタートさせました。二階は大きく、半年ほどで事業は軌道に乗りましたが、調理場として借りていた建物が予定よりも早く取り壊されることになり、活動を休止せざるを得なくなりました。この時の不完全燃焼の思いが 2 年後の再

避難所の炊き出しから始まったワタママ食堂

石巻市渡波地区は牡鹿半島の基部に位置し、震災時は 1/3 の家屋 (2,200 戸) が全壊になるなど、大きな被害を受けた地域の一つです。震災後すぐに渡波小学校が避難所になり、最大で 2,000 人もの人々が避難所での生活を余儀なくされる中、開設初期の頃から自治組織が作られ、避難者自ら協力をしながら炊き出しなども行っていました。しかし、1 ヶ月ほどすると皆で決めた役割が回らなくなり不公平感が生まれました。近隣の在宅避難者を含めた 3,000 食を超える日々の炊き出しが負担となり自衛隊に相談するも断られ、そこから当時外部支援で避難所に入っていた青年海外協力隊の OB・OG で立ち上げた「協力隊 OV 有志による震災支援の会」へ協力の要請があったと、代表の菅野さんは言います。菅野さんは、震災時は青年海外協力隊 OB として途上国支援の取り組みに関わっていました。山形県出身ということもあり、震災後すぐに仲間とともに渡波小学校避難所のサポートに入りました。



▲「渡波地域食堂」でのケーキ作り！



▲ワタママ食堂でのお弁当作り

オープンにつながります。

継続的な経営主体へと転換を図った 3 年間

2014 年 4 月、「ワタママ食堂」が再オープンしました。海沿いの場所を借り、調理場と食堂を備えた建物を建て、お母さんたちが笑顔で事業を再開しました。

再開の背景には、2013 年から 3 期にわたり支援を受けた「タケダ・いのちとくらし再生プログラム」(武田薬品工業株式会社が資金提供、日本 NPO センター運用) の存在があります。協力隊 OV 有志による震災支援の会による外部主体の活動から、地元へ根ざした継続的な経営主体へと継承をする 3 年間と位置づけ、主事業の経営安定化と既存の地域団体や活動との連携協働を段階的に進めました。

1 年目は 6 名の女性の雇用からスタートし、2 年目は 9 名、3 年目はシニア男性 3 名の雇用に加え、NPO 法人 Switch と連携し、引きこもりの若者の就労支援説明会を開催しデータ入力などの 8 名への働く場所の提供につなげました。そうした雇用を支えるマネジメント人材・チームの育成を強化するとともに、主事業である配食事業の質を高めるために 4 名が食品衛生管理責任者の資格を取得し、健康に配慮したメニュー開発と信頼の獲得に努めました。様々な努力が実り、採算ラインである 200 食の提供を達成することができました。この間、地域にも様々な状況変化がありました。仮設住宅から復興公営住宅へと転居が進む中、石巻市社会福祉協議会や仮設住宅自治会などと連携しながら配食を通じて高齢者(約 20 世帯)の見守り支援も行いました。

地域に必要な役割として、溶け込んでいくこと

2016 年 9 月には地域食堂「渡波たべらいん」を開業し、生活困窮家庭の子どもを中心に食事支援と居場所づくりを始めました。「タケダ・いのちとくらし再生プログラム」の助成金を活用し、地元の 10 団体が

実行委員会を組み、世代を超えて一緒に楽しく食事をする場として開催し、2017 年 6 月からは毎週開催しています。それぞれが役割を持ち合うことで協働での運営ができるようになりました。互いに関わり、気づき、補い合いながら、そこに住む人々が心地よく生活できるよう、地域全体で考える視点が確実に生まれ、経験として積み重なってきています。

2017 年は、ワタママ食堂の運営全体をスタッフに任せてきたと菅野代表は言います。自分たちで話し合い、問題があれば一つひとつ解決のための方法を模索し、日々チームで取り組むことです。避難所での炊き出しからのメンバー 3 人を含め、現在では総勢 8 人のパートタイムスタッフで運営をしていますが、段階的にチームでできることを増やしてきました。当事者意識が強くなることで現場ならではの試みも始まり、市民農園で収穫祭を行うなど、地域に根ざしたコミュニケーションの場づくりも進めています。

菅野代表自身は青年海外協力隊の OB としてこの地域に入り、仲間とともに国際緊急支援のノウハウを伝え続けてきました。緊急時の食の支援からワタママスマイルは生まれましたが、お弁当の販売と食堂は、地域になくてはならない事業として自立化の段階まで進めることができ、自身の役割は終えつつあると菅野代表は言います。まさに、渡波の地域に根ざした取り組みとして、地域に溶け込んで地元民が経営していく段階がきています。

一般社団法人 ワタママスマイル

<問合せ先>
〒986-2122 宮城県石巻市幸町 2-3
TEL▶0225-98-4701
E-mail▶watamamasmile@gmail.com
URL▶http://watamamasmile.org